

学校入脈

山崎高校編

2

目指せ甲子園



●1971年の兵庫大会で準優勝したメンバー。前列中央が石田山崎高校
●当時の写真。いずれも前列右から2人目が尾形、前列左から2人目が福元(尾形さん提供)



プロ野球巨人が日本シリーズ9連覇(1965〜73年)の黄金期にあった69年。山崎高校に入学した尾形正己(66)山崎24回、元新日鉄広畑野球部監督は、校舎の玄関先で同級生の福元晶三(65)現六甲市長に声を掛けられた。

「尾形、野球せんのか。監督が練習見に来い言うてるで」

尾形は安富中野球部出身。177センチの長身に恵まれていたが、7人き

ようだいの末っ子で父親を亡くし、高校で部活動をする余裕はなかった。見るだけなら軽い気持ちでグラウンドに足を運んだのが、今考えると人生の大きな分岐点だった。

監督の石田廣志(76)は尾形を見ると、「まあ来て座れ」とベンチに呼び、新品のユニホームを買ってきて練習に参加させた。強引な勧誘だったが、3日で野球好きに火が付いた。打撃練習ではネットを越えて民家の

挑む球児 町が一つに

瓦を割る特大の打球を披露。1年生から4番が定位置になった。

石田は当時26歳。強豪の育英高校(神戸)で甲子園に出場し、家業を継ぐため山崎に戻っていた。監督として最初の新生が尾形らの代。練習は厳しく、バットの芯で的確に捉える打撃練習を徹底した。育英などの強豪校とも練習試合を重ねた。

71年夏の兵庫大会。山崎高は3年の尾形を中心に打線が爆発し、初戦から3試合連続コールド勝ちを演じた。このとき神戸新聞運動部で高校野球キャップだった渡辺武夫(81)山崎8回目は、母校の活躍に目を見張った。そこひいきを疑われたくないので山高卒は隠したが、無名校の快進撃は大会の話題。連日の紙面に「山崎旋風」と見出しが躍った。

「田舎の高校でも注目される」。チームの士気が上がった。住民も選手を見ると「また勝ったんか」と声を掛け、町の応援ムードも高まった。山崎は1戦ごとに成長し、決勝までの6試合をチーム打率3割8分5厘、46得点で勝ち上がった。

最後の相手は練習試合では一度も勝てなかった報徳学園。会場の甲子園球場に数千人の応援団が駆けつけ

た。だが報徳は山崎の打者一人一人を研究し尽くしていた。自慢の打線は沈黙し、連投の投手陣は打ち込まれ、17対1の大差で力尽きた。

疲れ果てて山崎町役場まで戻った選手らを、町長ら大勢の住民が迎え入れた。学校までパレードが用意され、商店街にあふれた人から「ありがとう」と歓声が送られた。

町職員を経て市長になった福元は振り返る。「子どもたちが夢を求めて挑戦する姿に町は一つになった。たかが野球。されど、感動が人を動かした」

強打者で鳴らした尾形は巨人にドラフト4位で指名された。スカウトは「長嶋茂雄の後継」と口説いたが、社会人野球の強豪・新日鉄広畑(現日本製鉄広畑)に就職。選手を17年、監督を8年務め、都市対抗野球の準優勝など実績を残した。現在は県野球連盟会長を務める。

石田は母校育英の監督に招かれ、甲子園にも出場。県内外の高校や企業で2年前まで指導者として活躍した。準優勝メンバーの多くは地元に残り、今も交流を続けている。

敬称略
山崎川淳也
(古根川淳也)